

平成 17・18 年度情報メディアを活用した読書活動推進校の取組の概要

兵庫県教育委員会では、平成 15 年度より、「情報メディアを活用した読書活動推進校を指定しており、平成 18 年度末で、29 校の小・中学校が先進的な取組を行ってきた。

本節では、平成 14 年 8 月に閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」中の学校教育に関係する部分に掲げられている項目に従って平成 17・18 年度情報メディアを活用した読書活動推進校による実践事例の概要をまとめることとする。

なお、本事例集自体が極めて限られた紙幅の中でまとめられていることから、実践のすべてをカバーしていない可能性もあるが、各学校の重要な取組は記載しており、「情報メディアを活用した読書活動推進校事業」における取組のおおよその傾向は把握できるものとする。

(1) 全校一斉読書

14 校すべての学校において、年間を通じて全校一斉読書を行っている。実施する頻度は、毎日行う場合や期間を限定する場合など各学校により工夫されているが、大半の学校が児童生徒の読書習慣を身につけさせるためには、年間を通して行うことは効果的であると考えている。

実施の時間帯は始業前に実施している。とりわけ、中学校では 6 校すべてが毎日始業前に行っており、その後の授業への集中度に変化が見られたと報告している。また、小学校では、一斉読書の時間に教師や保護者による読み聞かせを取り入れ、読書意欲をさらに高めようとする取組も広がりを見せているとともに、中学校では、委員会の生徒による放送機器を使った読み聞かせ事例も複数の学校に見られる。



姫路市立書写中学校 朝読書の様子

(2) 読み聞かせ

読み聞かせは、すべての学校において、読書意欲を高めていく方法として取り入れられている。読み聞かせを行っている者としては、教職員とともに、保護者や地域の方等のボランティアを挙げている学校が多く、学校が家庭や地域と連携した取組のひとつとなっている。時間帯も始業前や昼休み、特設した時間帯等いろいろな時間帯に広がっており、ボランティアも自分にあった時間帯で協力する傾向がうかがえる。また、同じ時間帯に複数の教師やボランティアが異なる内容の読み聞かせを行うようにし、それを子どもに事前に知らせておくことで、子どもも自分の聞きたい読み聞かせを選択することができるようにした事例も見られ、読書に対する主体性を育てようとする取組として注目できる。

実施形態は、児童生徒の発達段階に応じて、ブックトーク、パネルシアター、校内放送による読み聞かせ、電子ボードによる読み聞かせなど多様な形態を導入している。さらに、上級生が下級生

に読み聞かせるなど、児童生徒が活動する場をつくり、関心意欲を高めようとしている学校も多い。

(3) 推薦図書コーナーの設置及び読書目標

この取組については記述しているのは、12校ある。推薦図書については、教職員からの推薦だけ



でなく、図書委員を中心として、図書だよりの中で「おすすめの本」を紹介している例や児童生徒が読んだ冊数によりランキング形式で推薦している例、子ども同士で読んだ本の紹介をしている例もある。また、低学年は50冊、中学年は40冊、高学年は30冊という読書目標を設定したり、がんばりカードによって読書意欲を高め、学校や家庭における読書習慣の確立に向けた取組の工夫も見られる。

南あわじ市立北阿万小学校：ブックCM

(4) 家庭等との連携

家庭との連携について、記述している学校は14校中7校である。「家庭でも読書タイムを！」と家庭での読書習慣をつけるための啓発として、読書月間に8日間保護者と共に読書することを勧めたり、「親子読書」を推進する「親子読書講演会」を実施している例もある。また、学校のホームページにコーナーを設け、図書情報を家庭に配信している例もある。

(5) 学級文庫の設置及び図書館の環境整備

図書館の環境整備については、学校の実態に応じた工夫が見られる。学級文庫の設置や様々なスペースを有効に活用して蔵書を分配配置し、身近に読書できるスペースをつくるなど、いつでもどこでも本にふれられる環境づくりが行われている。学校図書館では、配架について分類番号以外の「絵本」系、「読み物」系、「調べ学習」系といった内容別にしたり、また、書架を上から高学年、中学年、低学年用に配架する収容の工夫の例もある。また、リラックした雰囲気醸し出すために、植物や手作りマスコットの設置や採光の配慮による環境整備を行っている。こうして、学校図書館の持っている機能を有効に活用することにより、児童生徒の図書室利用者数が増加したという報告もある。

(6) 学校図書館の情報化

すべての学校で、パソコンとの併用や公共図書館との連携により、調べ学習に必要な資料の充実を図っていることが読み取れる。蔵書についての情報がデータベース化され、パソコンを使っての検索、バーコードをなぞるだけの貸出・返却業務を行っている学校は14校中8校である。データ

ベース化したことで貸出業務の簡略化できた。さらに蔵書検索をパソコンで行えるようになったことで、容易に読みたい本を探ることができるようになり、子どもが主体的に読書に取り組めるようになったという報告もある。

また、各自の貸出記録をもとに読書活動についての個別のアドバイスや児童の読書傾向を踏まえた選書購入への活用あり、情報化が進んだ学校図書館ならではの活用方法の開発が期待される。

(7) レファレンスの実施

レファレンスの実施について、記述している学校は4校あった。何か本を読みたいが、何を讀んでいいのかわからないという児童生徒も意外と多い。しかし、いっしょに本を選ぶことによって図書館とのつながりを深めていくことが多い。後日生徒が感想を言いに来たり、同じ作者の本を探すようになるなど読書を媒体としたコミュニケーションにより、図書館の好きな生徒、本を選ぶ力のある生徒を育てるとともに、児童生徒の主体的、意欲的な読書活動へと高めることにつながっていると思われる。学校図書館における蔵書の充実や環境整備も重要であるが、常時人がいて、児童生徒が読書についての相談等ができる体制づくりが読書活動の推進には欠かせないと思う。

(8) ボランティアの学校図書館運営への参加

学校がボランティア等で家庭・地域や学校と連携を行っている学校は、14校中12校である。前述の読み聞かせだけでなく、本の整理、カウンター業務、環境整備など学校図書館の運営に協力してもらうなど参加方法はさまざまである。また、総合的な学習の時間等における児童の選書の補助をしていただくことで、児童生徒の資料を活用した課題解決学習に効果的に取り組めたという報告もある。



赤穂市立赤穂小学校：PTAによる読み聞かせ

(9) 成果と具体的なデータ

学校の実態をもとにした推進計画に基づく取組を年度ごとに評価し、司書教諭をはじめとする学校関係者の意識の高揚を図ることはとても重要である。ここでは、すべての学校において、読書活動推進についての成果をデータも含めて示している。読書アンケートの結果、貸出冊数の変化、教師の読書活動に対する意識調査の結果などから課題と取組の成果が整理されている。そこから明らかになった課題をもとに、今後も学校図書館及び読書活動の更なる推進に向けての取組を期待する。